新聞記事にみる「神戸港の強制連行／強制労働」
―朝鮮人･中国人･連合国軍捕虜―

飛田雄一

アジア･太平洋戦争の時期に神戸港では強制連行された朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜が強制労働を強いられた。連合国軍捕虜が強制連行されたという表現には若干の違和感があるが、日本軍が占領した地域で捕虜となって連行されたのであるから、考えればまさに強制連行であろう。このテーマの調査については、1999 年 10 月に結成された「神戸港における戦時下朝鮮人･中国人強制連行を調査する会」（代表・安井三吉神戸大学名誉教授、以後、「調査する会」）が調査研究にあたっている。

神戸港の強制連行について、復刻された資料および書かれたものには以下のものがある。

①復刻版／神戸港における中国人強制連行資料／日本港運業界神戸華工管理事務所･神戸船舶荷役株式会社『昭和二十一年三月 華人労務者就労顛末報告書』神戸・南京をむすぶ会、1999 年 6 月
②飛田雄一「『戦時下神戸港における朝鮮人・中国人強制連行』」覚え書き」『むくげ通信』177 号、1999 年 11 月
③安井三吉「『記憶』の再生と歴史研究」『現代中国研究』12 号、現代中国研究会、2003 年 3 月
④「調査する会」編 『神戸港強制連行の記録－朝鮮人・中国人そして連合軍捕虜－』明石書店、2004 年 1 月
⑤「調査する会」編・発行『アジア・太平洋戦争と神戸港―朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜―』執筆は宮内陽子（「調査する会」、兵庫県在日外国人教育研究協議会）、2004 年 2 月
⑥ジョン・レイン著・平田典子訳『夏は再びやってくる－戦時下の神戸・オーストラリア兵捕虜の手記』神戸学生青年センター出版部、2004 年 3 月
⑦飛田雄一・安井三吉「 神戸港にみる強制連行」（『岩波講座・アジア・太平洋戦争』4 巻所収、2006 年 2 月）

その他に⑧『神戸港における戦時下朝鮮人･中国人強制連行を調査する会ニュース／いかり』1 号～9 号、2000 年 2 月～2004 年 7 月、がある。

「調査する会」では、薄い本と部厚い本を作ろうということになった。神戸市内の中学校の副読本として使用されることを願って 31 頁のブックレット⑤を出し、それまでの研究成果を資料とともに編集して 352 頁の本④を出した。残念ながらブックレットはいまだ副教材として正式に採用された学校はないが‥‥。

本稿では、神戸港の強制連行問題に関連する新聞記事を紹介する。特に 1941 年 12 月の太平洋戦争開始以降は、すべての新聞が御用新聞化されているという状況のもとでの「大本営発表」的な記事がほとんどと言っていいが、そのような記事のなかにも当時苦難を強いられた人々の状況を垣間見ることのできるものがある。そのいくつかを紹介したいと思う。（解読困難な文字について、普通は□とするが、ここでは一字ごとに「？」としている。）

●

記事１

1942 年 1 月 23 日／神戸新聞
米人抑留者今暁神戸へ
／わが武士道精神で保護取締り

善通寺に収容中のグアム島作戦における俘虜に非ざる米人抑留者が今暁六時、神戸へ到着する、抑留者は政府関係者六三名、航空関係者五名、宣教師一三名、一般市民五四名の総数百三五名で、うち婦人は七名、香川警察部員十名、憲兵三名と兵庫県外事課から受領に赴いた難波警部、刑部警部補が付添ひ、到着と同時に外事課の輸送トラックに分乗、内六四名は神戸区北野町三丁目のバターフイルド･エンド･スワイヤ汽船会社宿舎へ、残り七十名は旧居留地伊勢町のシーメンス･ミッション･インステイチウトへそれぞれ収容され、日本の庇護のもとにおかれる。（後略）

米人抑留者 今朝神戸へ
わが武士道精神で保護取締り
善通寺の別れ一幕

「抑留者」というのは捕虜ではない。しかし「敵国人」であるというので、神戸市内には４ヶ所の「抑留所」が作られて日本軍の管理下にあった。当時、日本軍の捕虜関係の責任者であった松本充司さん（1917 年生、神戸市在住）が「調査する会」の集会に参加してくださり、後日、この抑留所の場所も記載した貴重な地図を提供してくださった。カラーコピーしたものを必要な方にはお分けしている（500 円＋送料 160＝660 円）その第一抑留所が神戸市灘区青谷にあったが、調査する会のフィールドワークに松本さんも同行していただきその場所を確認している。

記事２

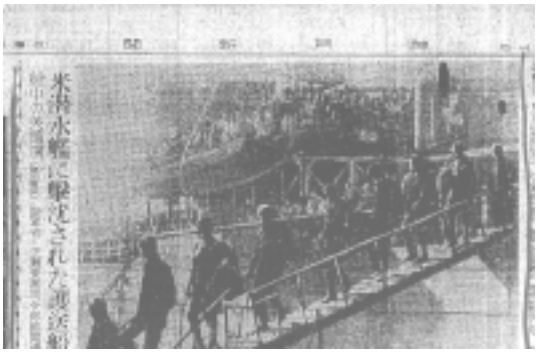
1942 年 1 月 24 日　神戸新聞
芝生で日向ぼっこ／ほっと一息
抑留米人神戸の第一日

二十三日朝神戸に送られてきたグアム島の米人抑留者百三十二名は神戸到着と同時に一班五十六名は神戸区北野町一丁目のバターフヰールド･エンド･スワイア汽船会社の寄宿舎へ、他の一班七十六名は旧居留地伊藤町のシーメンス･インスティチウトへそれぞれ収容され、この日から寛大な皇国の庇護のもとにおかれることになった、輸送の大任を果たした県外事連絡係の難波警部から視察係の？？部へバトンは移され、ここに彼らの港都での抑留生活が始まったのである。（後略）

芝生で日向ぼっこ
ほっと一息 抑留米人神戸

記事３

1942 年 10 月 11 日／神戸新聞
リスボン丸門司へ／知つて魚雷攻撃／米潜水艦の背信に興奮／英捕虜門司入港
米こそ人類の敵だ／日本の武士道に敬慕



本文は省略するが、写真がいい？ので当時の雰囲気をつたえるために収録した。

記事４

1942 年 10 月 13 日　神戸新聞

英俘虜一行、神戸の収容所へ

陸軍輸送船リスボン丸で内地護送中鬼畜の如き米潜水艦の襲撃を受け全員溺死の憂目から皇軍の恩讐を越えた救護で九死に一生を得た英俘虜一行は十一日神戸に到着、俘虜収容所に入った、十二時五十分神戸駅に降り立った俘虜○○名は粛然と東遊園地へ。

東遊園地では森本安浩中尉の前に整列、閲兵を受け“？子はこれより俘虜収容所に入る、？子の？？？？は認め逃亡の意なく規律に従ふものは同情をもって？子の軍人たる名誉を尊重して公正に取扱ふものである”と？？両全の訓示に深く頭を下げて一小隊毎に“日本軍の軍律に従ひ逃亡せず”の宣誓に右手を挙げて誓ふ、次で所持品検査を受けかくて市民の注視を浴びながらロンドンの英俘虜は粛々と収容所に入った。

記事５

1943 年 7 月 29 日／神戸新聞

朝鮮人名古屋より神戸へ／船舶荷役に一肌／名古屋から半島人部隊来援助

神戸港の荷役増強に一役脱がうと遠路はるばる名古屋から愛国の念燃ゆる半島人荷役労力奉仕隊一行七十余名が神戸船舶荷役株式会社錦見所長引率のもと二十八日午後三時八分神戸駅着列車で来神した。直に湊川神社に赴き花房湊川神社主典により修？を受けてのち神戸国民職業指導所有方総務部長の訓示があって一行は約一週間滞在し、港湾荷役に挺身することになってゐる（写真は湊川神社に参拝した荷役に来援の半島人部隊）

神戸新聞　1943.7.29

記事６

1944 年 5 月 20 日／神戸新聞

半島労務者を指導

激励慰問に近く「委員会」設立

生産に、貯蓄に、また国防土木作業にとあらゆる戦力増強部門に皇国臣民として燃ゆる愛国心から輝かしい足跡をのこしてゐる半島労務者の契約延長に対する異数の優遇の画期的措置が講ぜらるることとなったが、相当数の本年満期の半島労務者を持つ兵庫県では、協和会勤労報告隊等農村の土地改良にも素晴らしい稼働率を示したこれら半島出身の産業戦士指導に万全を期して、一層戦意を昂揚せしむるため厚生省健民局の指導により彼等を心から慰問激励する強力な機関として成田知事を会長に「移入半島人労務者指導委員会」を結成することとなり、伊藤内政部長、菱川厚生、武末特高、渡辺労政、栗栖国民動員各課長に

大阪鉱山監督局、協和会、鉄鉱、鉱山その他関係統制会、工場事業場代表を委員として来る三十一日午前九時から県会議事堂で「設立準備協議会」を開催する。

同委員会は半島同胞に対する深い理解と援護心から内地の慣れない寮生活に不自由を忍んで、ひらすら生産第一線に挺身してゐる労務者の慰安激励主眼とし適切な生活指導、教育訓練、職域指導、給与賞与、宿舎設備などに細心の注意を払ってゆかうといふので、労務者本人への物心両面の待遇に並行してその家族に対しても慰問品の発送、郷土演劇団の派遣など積極的に援護の手をさし伸べることになってゐる。

半島労務者を指導

神戸新聞　1944.5.20

記事７

1944 年 5 月 23 日　神戸新聞
寮長は快男児の中尉
半島の若き訓練工【大手寮訪問記】

山陽電鉄大手停留所山側のアパートかな、と思われる明るい感じの建物それが川崎製鋼工場の訓練工たちにとっては楽しい我が家の大手寮なのだ、「やあ！」寮長の寺井氏だ。北支中支を転戦した陸軍中尉で、昨年十一月初旬、単身朝鮮に渡り○○名の訓練工たちを糾合し得たのだが、船の都合で出発できず、京城の某広場で半ケ月も待機、不安と焦燥に眠れぬ夜を続けたが零下七度の身を切るはうな寒風を衝いて行軍に、分隊教練を敢行した。寮に着いた翌日からもう烈しい訓練だ。

体力の練成に加えて精神教育を主眼とする寮長以下教官の必死な努力は僅か一ヶ月で〝産業戦士の資質付与〟という目的を立派に達成，押迫った年の暮れに大手寮の窓硝子は時ならぬ歓声によってピリピリと震えた、十八歳から二十八歳までの半島若者七十五名の顔はみな明るい歓喜の色が□つた。

職場での熱心さには頭が下がります、殊に指導員や先輩工員への信頼から湧き上がる忠実さや、服従心の旺盛なことは予期以上のものです。

寮には看護婦さんもゐるのだが、公傷病は病人の監視に一苦労だという、それは公傷で生爪を剥がした患者や、三十八、九度の発熱患者が、少しでも油断してゐるとこっそり抜け出して工場へ行ってしまふからである。聖戦完遂に増産が何如に大きな役割を持ってゐるかを、徹底的に認識してゐるのだ「毎晩十一時半には寮の各部屋を廻ってみるのですがこれがまた私の嬉しい仕事の一つです、毛布の何も蹴飛ばして、健康な寝息を立ててゐる無邪気な訓練工たちの姿に、一日の労苦を感謝しながら、一人々々に毛布を着せかけてやるのですが、何ともいえない気持です‥‥」

ＸＸ医大在学中に教授と口論して自ら退学し、日大に移ったという快男児の寺井寮長はお医者の勉強をしてゐるだけに、生理衛生学は玄人だし、寮長として満点だ（つゞく）多木生

神戸新聞　1944.5.23　カットより

記事８

1944 年 5 月 24 日　神戸新聞
何かしら熱いもの
半島の若き訓練工「大手寮訪問記」

つひ最近のこと、隣町の大手町二丁目のクリニング屋さんから出火、寮長は直ちに非常呼集を行った、慌てふためくかと思ひの外電撃の整列ぶりだった。宙を飛んで火と闘ひ消防自動車が来た時には隣家への延焼を喰い止めてゐた、また最近に光□（不明）明洙君

と山本宗平君の父君が病死したといふ悲報があったが両君は、いひ合わせたやうに帰らなかったー

私たちは、招集令を頂いたつもりでゐるのです、戦場にある皇軍兵士は父母が死んだからといって、内地に帰ってくることが出来ますか‥‥地下の亡父も帰国せぬ方を喜びます。

娯楽会は多士済々、まづ日蓄当選歌手といふ経歴をもつ綾城幸作君、朝鮮民謡コンクールに一等当選したといふ金沢潤錫君、ギターの名手里見君などが演技を御披露に及ぶ、最近工場の労務課長からハーモニカを寄付されたので、訓練工たちは大喜び、日々点呼までの賑やかさ、それから野菜も作ってゐる。見ると寮の東手の十坪ばかりの畑に葱やしゃもじ菜が行儀よく並んでゐる、夜勤らしい訓練工が二、三人裸足で野菜の世話に没頭してゐると、突然、隊長殿！蛇です、蛇がでました、その中の一人が素ツ頓狂な声をあげて、いきなり跳ねあがった、青大将がその足もとを悠然とのたってゐる「何だ、大きな男が！、蛇はどうもしやせんさ、安心しろ」寺井寮長が怒鳴ると、その訓練工は極り悪さうに照れながら頭を掻いた「無邪気なもんですよ！然しどうです、内地語も中々流暢なものでせう」この蛇事件は記者に何か知らぬ熱いものを感じさせた（終）多木生

神戸新聞　1944.5.24

記事９

1944 年 6 月 13 日　神戸新聞

半島訓練工の神宮参拝　神戸製鋼で

神戸製鋼では本月第一回目の電休日を利用して同工場で敢闘してゐる半島訓練工一同を同訓練隊長引率のもとに午前五時から起床して一泊二日の予定で伊勢の神宮参拝に行ったが、これを訓練工達喜ぶことか喜ぶまいことか、しかも初めて拝す神宮の社殿前から動こうとしなかった位だとは右隊長の言葉である。

記事１０

1944 年 6 月 13 日　神戸新聞

半島移入労力の検討（上）風俗習慣への理解／来てよかったと思はせて欲しい／本社共催の懇談会

朝鮮の対戦争寄与は経済面にあつてはアルミ、マグネなど軽工業や製鉄などますますその重要性を高める反面、労力面にあつても「移入労力」のわが内地労力に占める比重は、特に鉱山方面において六割以上を占むるに至った、重工業県たる本県にも移入労務者数は神戸、尼崎方面を主として○千名に達し、これらは殆ど純真な年頃の青年ばかりである、大東亜民族十億を数へるとはいへ、それら東亜の解放への主体力となり、内地に来て内地人と協力してゆけるのは、その生活、風俗、習慣、国語を解する半島出身者以外に求められない、この点に鑑み本社は朝鮮労務者？？？の来神を機に本社では県協和会と共催で、県下の主要工場代表者三十余氏の出席を乞い、両者のあいだに忌憚のない事情の交換と懇談を行った。

この懇談会の（下）は、同年6月14日に掲載されている。「工場で親身の指導／家庭との連絡も肝要」の見出しがある。

記事１１

1945年1月12日　神戸新聞

生産へこの特攻魂／半島同胞／いまぢや職場の大黒柱／粘りと純情で明朗敢闘ご奉公／配置の競願／川崎重工業

共に米英を撃たう、航空兵として、また設備隊員として前線に奮戦している半島同胞は兵庫県下の軍需工場に在っても半島生産特攻隊員となって生産増強に涙ぐましく敢闘を続けてゐる、温情の寮長に続きまた親子、兄弟が生産現場に挺身し、さらに職場においては「一日も早く重要作業に配置して下さい」と嘆願するなど生産戦場に内地と同胞と一体となり？しい増産意欲を盛りあげ、特有のねばり強さを通し素晴らしい能率をあげ工場の人々をいたく感激させてゐるが、いま半島生産隊の力強い姿にふれて見よう。

？？川崎重工業某工場の生産隊列に半島出身青年が加わったが新春とともに訓練工の肩書きとともに早くも現場に姿を現わして敢闘してゐる、既に彼らの先輩多数が一年有余の前からこの工場に在って日毎に示してきた逞しい生産能力が内地工員たちを優に凌駕してその刺激にもなっていることから今度の増員に際しても特に採用された訳でもある。

二十名余りは内地言葉に不自由であるが、大体に教育程度も上に在るものばかりで光山虎雄君は日大専門部出身平安北道所の？？だった、金原龍裕君は法政大専門部出身でもある、会社に着いて訓練工の宿舎と定められている芦屋市打出寮に落着いて二三日もすると〝一日も早く現場に就かせて下さい〟と嘆願して班長たちに強い感銘を与えた。

新参にして既に斯くの如しだ、先輩たちの敢闘振りを覗へば感激させられる話題の数々を生んでゐる、だからこの新参到着の報を聞いただけで各部の現場からはその配置を競願して労務課員に嬉しい悲鳴を上げさせたものだ、半島出身者たちはすべて〝訓練工〟の名のものに現場に配置されている、この訓練工の配置があるところ工員も学徒も、勤労隊員たちも激励させられまた協力精神を促進させられるのである。

ある部はそのため一二〇%の能率を上げてゐるト木金求君は足部に負傷しても翌日敢然と職場を堅守、南原？君と金原龍幹君は母の死亡の手にしても〝帰らぬ〟と頑張ったうえ爾来六ヶ月を皆勤して半島出身者の意気を示し、松谷吉球君は鋼塊引出器ほか二点の新工夫をして努力不足を補い安全感を与えて作業能率を上げたため表彰されまた錦川三植君は輸送に挺身奮闘して特に近畿管理部から感謝状を贈られたりなど四十七名からの表彰者をだしてゐる、朝七時から十二時間の現場作業後さしもの健体にも相当こたへるところがあるのだが、一同の必？の信念はこれを苦痛とせ？めないのだ。

昨年来にはこのうちから初めての入営兵九名を送り陸海軍志願兵も十数名数へる、大江中尉を寮長とする打出寮における日ごろの訓練から湧然と絶えざる生産意欲を湧き立たせてゐる、この訓練工たちは全くこの工場の生産特攻隊とも見られるのだ

生産へこの特攻魂
いまぢや職場の大黒柱
粘りと純情で明朗敢闘ご奉公
半島同胞

●

調査する会の活動は継続している。残された課題はモニュメントの建設だ。会では、歴史を心に刻むとともに、「石」に刻むことが大切だと考えている。歴史をできるかぎり現実的に感じることが必要だが、実際にその歴史の現場を実感させてくれる「もの」がいる。神戸電鉄朝鮮人労働者のモニュメントが1996年に完成しているが、そのモニュメントは、おおくのフィールドワークの訪問先にもなっている。

神戸港の強制連行／強制労働の歴史を刻んだモニュメントの建設を是非実現したいと思う。

（記事を提供していただいた金慶海さん、堀内稔さん、高木伸夫さんに感謝します。）